

ひよつとこ

芥川龍之介

青空文庫

吾妻橋あづまはしの欄干らんかんによつて、人が大ぜい立っている。時々巡査が来て小言こごとを云うが、すぐまた元のように人山ひとやまが出来てしまう。皆、この橋の下を通る花見の船を見に、立っているのである。

船は川下から、一二艘そうずつ、引き潮の川を上つて来る。大抵は伝馬てんまに帆木綿ほもめんの天井を張つて、そのまわりに紅白のだんだらの幕をさげている。そして、舳みよしには、旗を立てたり古風な幟のぼりを立てたりしている。中にいる人間は、皆酔っているらしい。幕の間から、お揃いの手拭を、吉原よしわらかぶりにしたり、米屋かぶりにしたりした人たちが「一本、二本」と拳けんをうっているのが見える。首をふりながら、苦しそうに何か唄っているのが見える。それが橋の上にいる人間から見ると、滑稽こっけいとしか思われない。お囃子はやしをのせたり楽隊をのせたりした船が、橋の下を通ると、橋の上では「わあつ」と云う晒わらい声こゑが起る。中には「莫迦ばか」と云う声も聞える。

橋の上から見ると、川は亜鉛板とたんいたのように、白く日を反射して、時々、通りすぎる川蒸汽かじがその上に眩しい横波の鍍金めつきをかけている。そうして、その滑なめらかな水面かを、陽気な太鼓の音、笛ねの音、三味線の音が虱しらみのようにむず痒かゆく刺さしている。札幌さっぽろビールの煉瓦れんが壁かべのつき

る所から、土手の上をずっと向うまで、煤すすけた、うす白いものが、重そうにつづいているのは、丁度、今が盛りのお桜である。言問ことといの棧橋さんばしには、和船やボートが沢山ついているらしい。それがここから見ると、丁度大学の艇庫ていこに日を遮られて、ただごみごみした黒い一色になつて動いている。

すると、そこへ橋をくぐつて、また船が一艘出て来た。やはりさつきから何艘も通つたような、お花見の伝馬である。紅白の幕に同じ紅白の吹流しを立てて、赤く桜を染めぬいたお揃いの手拭で、鉢巻はちまきをした船頭が二三人櫓ろと棹さおとで、代る代る漕いでいる。それでも船足は余り早くない。幕のかけから見える頭数は五十人もいるかと思われ。橋をくぐる前までは、二艇三味線で、「梅にも春」か何かを弾いていたが、それがすむと、急に、ちやんぎりを入れた馬鹿囃子ばやしが始まつた。橋の上の見物がまた「わあつ」と晒わらい声を上げる。中には人ごみに押された子供の泣き声も聞える。「あらごらんよ、踊っているからさ」と云う甲走かんぱしった女の声も聞える——船の上では、ひよつとこの面をかぶつた背の低い男が、吹流しの下で、馬鹿踊を踊っているのである。

ひよつとこは、秩父銘仙ちちぶめいせんの両肌をぬいで、友禪ゆうぜんの胴へむき身絞みしぼりの袖をつけた、派手な襦袢じゆばんを出している。黒八の襟がだらしなくはだけで、紺献こんけん上じょうの帯がほどけたな

り、だらりと後へぶら下がっているのを見ても、余程、酔っているらしい。踊は勿論、出たらめである。ただ、いい加減に、お神楽堂の上の莫迦のような身ぶりだとか、手つきだとかを、繰返しているのにすぎない。それも酒で体が利かないと見えて、時々はただ、中心を失つて舷ふなばたから落ちるのを防ぐために、手足を動かしているとしたか、思われない事がある。

それがまた、一層可笑おかしいので、橋の上では、わいわい云つて、騒いでいる。そうして、皆、晒わらいながら、さまざまな批評を交換している。「どうだい、あの腰つきは」「いい気なもんだぜ、どこの馬の骨だろう」「おかしいねえ、あらよろけたよ」「一いっそ素面すめんで踊りやいいのにさ」——ざつとこんな調子である。

その内に、酔よいが利よいて来たのか、ひよつとこの足取がだんだん怪しくなつて来た。丁度、不規則な Metronome のように、お花見の手拭で頬かぶりをした頭が、何度も船の外へのめりそうになるのである。船頭も心配だと見えて、二度ばかり後うしろから何か声をかけたが、それさえまるで耳にはいらなかつたらしい。

すると、今し方通つた川蒸汽の横波が、斜かに川面かわもをすべつて来て、大きく伝馬の底ゆすを揺り上げた。その拍子にひよつとこの小柄な体は、どんとそのあおりを食つたように、ひよ

ろひよる前の方へ三足ばかりよろけて行つたが、それがやつと踏止つたと思うと、今度はいきなり廻転を止められた独樂こまのように、ぐるりと一つ大きな円をかきながら、あつと云う間に、メリヤスの股ももひき引をはいた足を空へあげて、仰向けに伝馬の中へ転げ落ちた。

橋の上の見物は、またどつと声をあげて晒つた。

船の中ではそのはずみに、三味線の棹さおでも折られたらしい。幕の間から見ると、面白そうに酔つて騒いでいた連中が、慌てて立ったり坐つたりしている。今まではやっていた馬鹿囃子も、息のつまつたように、ぴつたり止んでしまった。そうして、ただ、がやがや云う人の声ばかりする。何しろ思いもよらない混雑が起つたのにちがいない。それから少しばら時すると、赤い顔をした男が、幕の中から首を出して、さも狼狽したように手を動かしながら、早口で何か船頭に云いつけた。すると、伝馬はどうしたのか、急に取舵とりかじをとつて、舳みよしを桜とは反対の山の宿の河岸しゆくかしに向けはじめた。

橋の上の見物が、ひよつとこの頓死した噂を聞いたのはそれから十分の後のちである。もう少し詳しい事は、翌日の新聞の十把じつぱい一束と云う欄にのせてある。それによると、ひよつとこの名は山村平吉、病名は脳溢血と云う事であつた。

×

×

×

山村平吉はおやじの代から、日本橋の若松町にいる絵具屋である。死んだのは四十五で、後には痩せた、雀斑そばかすのあるお上かみさんと、兵隊に行っている息子とが残っている。暮しは裕ゆたかだと云うほどではないが、雇やと人いんにんの二三人も使つて、どうにか人並にはやっているらしい。人の噂では、日清戦争頃に、秋田あたりの岩いわ緑ろく青しょうを買占めにかかったのが、当つたので、それまでは老鋪しんせと云うだけで、お得意の数も指を折るほどしか無かつたのだと云う。

平吉は、円まる顔がおの、頭の少し禿げた、眼尻こしわに小皺こしわのよっている、どこかひょうきんな所のある男で、誰にでも腰が低い。道楽は飲む一方で、酒の上はどちらかと云うと、まずいい方である。ただ、酔うと、必ず、馬鹿踊をする癖があるが、これは当人に云わせると、昔、浜町の豊田の女将おかみが、巫女舞みこまいを習つた時分に稽古をしたので、その頃は、新橋でも芳町でも、お神楽かぐらが大流行だつたと云う事である。しかし、踊は勿論、当人が味噌きせんを上げるほどのものではない。悪く云えば、出たらめで、善く云えば喜撰きせんでも踊られるより、嫌味がないと云うだけである。もつともこれは、当人も心得ていると見えて、しらふの時には、

お神樂のおの字も口へ出した事はない。「山村さん、何かお出しなさいな」などと、すすめられても、冗談に紛らせて逃げてしまう。それでいて、少しお神酒みきがまわると、すぐに手拭をかぶって、口で笛と太鼓の調子を一つにとりながら、腰を据えて、肩を揺って、塩ひ吹面舞よつとこまいと言うのをやりたがる。そうして、一度踊り出したら、いつまでも囃ひのつて、踊っている。はたで三味線を弾いていようが、謡をうたっていようが、そんな事にはかまわない。

ところが、その酒が崇たつて、卒中のように倒れたなり、気の遠くなつてしまつた事が、二度ばかりある。一度は町内の洗湯せんとうで、上り湯を使いながら、セメントの流しの上へ倒れた。その時は腰を打つただけで、十分とたたない内に気がついたが、二度目に自家うちの蔵の中で仆たおれた時には、医者を呼んで、やっと正気にかえして貰うまで、かれこれ三十分ばかりも手間どつた。平吉はその度に、医者から酒を禁じられるが、殊勝らしく、赤い顔をしずにいるのはほんのその当座だけで、いつでも「一合位は」からだんだん枩ます数かずがふえて、半月とたたない中に、いつの間にかまた元の空阿弥もくあみになつてしまう。それでも、当人は平気なもので「やはり飲まずにいますと、かえつて体にいけませんようで」などと勝手な事を云つてすましている。

×

×

×

しかし平吉が酒をのむのは、当人の言うように生理的に必要があるばかりではない。心理的にも、飲まずにはいられないのである。何故かと云うと、酒さえめば気が大きくなつて、何となく誰の前でも遠慮がい入らないような心持ちになる。踊りたければ踊る。眠たければ眠る。誰もそれを咎める者はない。平吉には、何よりも之が難ありがた有いのである。何故これが難有いか。それは自分にもわからない。

平吉はただ酔うと、自分がまつたく、別人になると云う事を知っている。勿論、馬鹿踊を踊つたあとで、しらふになつてから、「昨夜は御盛ゆうべんでしたな」と云われると、すつかりてれてしまつて、「どうも酔けばらうとだらしはありませんでね。何をどうしたんだか、今朝けさになつてみると、まるで夢のような始末で」と月並な嘘を云っているが、実は踊つたのも、眠てしまつたのも、いまだにちゃんと覚えている。そうして、その記憶に残っている自分と今日の自分と比較すると、どうしても同じ人間だとは思われない。それなら、どつちの平吉がほんとうの平吉かと云うと、これも彼には、判然とわからない。酔っている

のは一時で、しらふでいるのは始終である。そうすると、しらふでいる時の平吉の方が、ほんとうの平吉のように思われるが、彼自身では妙にどっちとも云い兼ねる。何故かと云うと、平吉が後で考えて、莫迦ばか莫迦しいと思う事は、大抵酔った時にした事ばかりである。馬鹿踊はまだ好い。花を引く。女を買う。どうかすると、ここに書けもされないような事をする。そう云う事をする自分が、正気の自分だとは思われない。

Janusの云う神様には、首が二つある。どっちがほんとうの首だか知っている者は誰もいない。平吉もその通りである。

ふだんの平吉と酔っている時の平吉とはちがうと云った。そのふだんの平吉ほど、嘘をつく人間は少いかもされない。これは平吉が自分で時々、そう思うのである。しかし、こゝう云ったからと云つて、何も平吉が損得の勘定ずくで嘘をついていると云う訳では毛頭もうとうない。第一彼は、ほとんど、嘘をついていると云う事を意識せずに、嘘をついている。もつともついでしてしまうとすぐ、自分でもそうと気がつくが、現についている時には、全然結果の予想などをする余裕は、無いのである。

平吉は自分ながら、何故そう嘘が出るのかわからない。が人と話していると自然に云おうとも思わない嘘が出てしまう、しかし、格別それが苦くになる訣わけでもない。悪い事をし

たと云う気がする訳でもない。そこで平吉は、毎日平気で嘘をついている。

×

×

×

平吉の口から出た話によると、彼は十一の年に南伝馬町の紙屋へ奉公に行つた。するとその旦那は大の法華氣違いで、三度の飯も御題目を唱えない内は、箸をとらないと云つた調子である。所が、平吉がお目見得をしてから二月ばかりするとそこのお上みさんがふとした出来心から店の若い者と一しよになつて着のみ着のままでかけ落ちをしてしまつた。そこで、一家安穩のためにした信心が一向役にたたないと思つたせい、法華氣違いだつた旦那が急に、門徒へ宗旨替をして、帝釈様のお掛地を川へ流すやら、七面様の御影を釜の下へ入れて焼くやら、大騒ぎをした事があるそうである。

それからまた、そこに甘までいる間に店の勘定をごまかして、遊びに行つた事が度々あるが、その頃、馴染みになつた女に、心中をしてくれと云われて弱つた覚もある。とうとう一寸逃れを云つて、その場は納まつたが、後で聞くとやはりその女は、それから三日ばかりして、鋳屋の職人と心中をしていた。深間になつていた男がほかの女に見かえた

ので、面^{つら}当^あてに誰とでも死にたがっていたのである。

それから廿の年におやじがなくなつたので、紙屋を暇をとつて自家^{うち}へ歸つて来た。半月ばかりするとある日、おやじの代から使つていた番頭が、若旦那に手紙を一本書いて頂きたいと云う。五十を越した実直な男で、その時右の手の指を痛めて、筆を持つ事が出来なかつたのである。「万事都合よく運んだからその中にゆく。」と書いてくれと云うので、その通り書いてやつた。宛名が女なので、「隅へは置けないぜ」とか何とか云つて冷評^{ひやか}したら、「これは手前の姉でございます」と答えた。すると三日ばかりたつ内に、その番頭がお得意先を廻りにゆくと云つて家を出たなり、いつまでたつても歸らない。帳面を検べてみると、大穴があいている。手紙はやはり、馴染の女の所へやつたのである。書かせられた平吉ほど莫^ば迦^かをみたものはない。……

これが皆、嘘である。平吉の一生（人の知っている）から、これらの嘘を除いたら、あとには何も残らないのに相違ない。

×

×

×

平吉が町内のお花見の船の中で、お囃子はやしの連中にひよつとこの面を借りて、舳ふなばたへ上つたのも、やはりいつもの一杯機嫌でやったのである。

それから踊っている内に、船の中へころげ落ちて、死んだ事は、前に書いてある。船の中の連れんじゆう中は、皆、驚いた。一番、驚いたのは、あたまの上へ落ちられた清元のお師匠さんである。平吉の体はお師匠さんのあたまの上から、海苔のりまき巻や、うで玉子の出ている胴の間の赤毛布あかゲットの上へ転げ落ちた。

「冗談じゃあねえや。怪我けがでもしたらどうするんだ。」これはまだ、平吉が巫山ふざけ戯げていると思つた町内の頭かしらが、中ちゆう腹ばらで云つたのである。けれども、平吉は動くけしきがない。

すると頭の隣かしろにいた髪結床かみゆいどこの親方が、さすがにおかしいと思つたか、平吉の肩へ手をかけて、「旦那、旦那……もし……旦那……旦那」と呼んで見たが、やはり何とも返事がない。手のさきを握っていると冷くなっている。親方は頭かしらと二人で平吉を抱き起した。一同の顔は不安らしく、平吉の上にさしのべられた。「旦那……旦那……もし……旦那……旦那……」髪結床の親方の声が上がって来た。

するとその時、呼吸とも声ともわからないほど、かすかな声が、面めんの下から親方の耳へ伝つて来た。「面めんを……面をとつてくれ……面を。」頭と親方とはふるえる手で、手拭と

面を外した。

しかし面の下にあった平吉の顔はもう、ふだんの平吉の顔ではなくなっていた。小鼻が落ちて、唇の色が変つて、白くなつた額には、油汗が流れている。一眼見たのでは、誰でもこれが、あの愛嬌のある、ひょうきんな、話のうまい、平吉だと思うものはない。ただ変らないのは、つんと口をとがらしながら、とぼけた顔を脰の間の赤毛布あかゲットの上に仰向けで、静に平吉の顔を見上げている、さっきのひよつとこの面ばかりである。

(大正三年十二月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集¹」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年9月24日第1刷発行

1995（平成7）年10月5日第13刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j:utyama

校正：earthian

1998年11月11日公開

2004年3月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ひよつとこ

芥川龍之介

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>